

19世紀アメリカ英語における間接受動文について

Indirect Passive in 19th Century American English

藤 内 響 子

I

‘give’ や ‘send’ のようないわゆる授与動詞には3種類の受身文が考えられる。例えば、*She sent him a long letter* の受身文は(1)のようになる。

- (1) a. He was sent a long letter.
- b. A long letter was sent to him.
- c. A long letter was sent him.

(1)の3つの受身文のうち、1a は間接目的語を主語に取る構文であり、1b および1c は直接目的語を主語に取る構文である。それぞれ、主語にならなかったほうの目的語は、保留目的語として文中に残る。このうち、1b と1c に関して、いくつかの文法書間で意見の対立が見られるため、藤内 (2001) で調査したところ、次のようなことがわかった。1950年以降の数十年で、特に1c 型が置かれた状況に変化が生じ、その変化に対して1a 型が深く関わっている可能性がある、ということである。19世紀以降のアメリカ英語における1a 型の変遷、および、イギリス英語における3 型の状況について調査する必要が出てきた。そこで、本研究ノートでは、研究の前段階として、まず19世紀のアメリカ英語

における、1a 型の状況を調査してみた。

調査に用いたテキストは、19世紀から20世紀初頭までの合計21点である。(2)に刊行年代順に挙げる。

(2)

Irving: *The Legend of the Sleepy Hollow* (1819-1820)

Poe: *The Fall of the Home of the Usher* (1839)

Emerson: *The Young American* (1844)

Hawthorne: *The Scarlet Letter* (1850)

Melville: *Moby-Dick* (1851)

Thoreau: *Walden, or Life in the Woods* (1854)

Stowe: *Uncle Tom's Cabin* (1852)
Soujourner Truth, The Libyan Sibyl (1863)

Alger: *Ragged Dick and Struggling Upward* (1868)

Alcott: *Little Women* (1868)
Good Wives (1869)

Twain: *The Adventure of Thomas Sawyer* (1876)
The Adventure of Huckleberry Finn (1884)

Burnett: *Little Lord Fauntleroy* (1886)

- The Little Princess* (1888)
- Bierce: *Can Such Things Be?* (1893)
- Crane: *The Red Badge of Courage* (1895)
- H.James: *Turn of the Screw* (1898)
- Chopin: *The Awakening* (1899)
- Dreiser: *Sister Carrie* (1900)
- London: *The Call of the Wild* (1903)

調査した動詞は、授与動詞のうち、間接目的語を文末に移動した場合に to を要求するものであり、A.S.Hornby: *A Guide to Patterns and Usage in English* 等を参考にして選んだ。本調査の結果と藤内 (2001) の調査結果をまとめ合わせたものが(3)の表 1 である。括弧内の数字は、保留目的語が代名詞である例を示している。

(3)

表 1	1a 型	to あり (1b 型)	to なし (1c 型)
Afford	0	0	3(3)
allot	0	3(2)	0
allow	7	1(0)	4(1)
award	0	0	0
bring	0	4(4)	2(2)
deny	7	3(2)	3(3)
do	1	1(0)	3(2)
fetch	0	0	0
forbid	0	0	0
give	8	38(13)	22(21)
grant	0	1(1)	1(1)
hand	0	4(2)	2(2)
lend	0	2(2)	0
offer	4	2(1)	3(3)
owe	0	0	0
pass	0	1(0)	0
pay	0	1(0)	0
permit	0	0	1(1)
proffer	0	0	0
promise	1	0	0
read	0	0	0
refuse	0	1(0)	0
render	0	0	1(1)
restore	0	5(4)	0
sell	0	7(1)	0
send	0	12(5)	2(2)
show	2	0	1(1)
spare	5	1(0)	1(1)
teach	8	0	2(2)
tell	29	1(0)	2(2)
write	0	1(1)	0
計	72	89(38)	53(48)

現在では、3種類の型の中で最も自然な形とされている1a型は、他の2つよりも遅れて登場し、17、8世紀から良く使われるようになったとされている。表を見てみると、1a型が19世紀の段階ですでに他の2つと遜色なく使用されていることがわかる。また、動詞によってどの型を好むかが、ある程度見て取れるのも興味深い。この結果を元に今後は、現代英語での調査およびイギリス英語での調査結果を加えて、歴史的考察を行いたい。

参考文献

(本稿で言及したものに留める)

Hornby, A. S. 1954. *A Guide to Patterns and Usage in English*. London: Oxford Univ. Press.

藤内響子 2001. 「19世紀アメリカ英語における “A long letter was sent him” 型構文」
九州情報大学研究論集 第3巻 第1号
pp.71 75.